

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2022年度開講科目

(授業形態や教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部04220031

教授 堀江 宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金3 ハイブリッド・法文二号館2番大教室

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員を中心に、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践を取り上げる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

授業計画 以下は変更になる可能性もある。

- 10/7 堀江宗正 死生学とは何か
- 10/14 高野 明 大学生の自殺防止
- 10/21 池澤 優 死生学と宗教
- 10/28 菊地達也 イスラム教における死生観
- 11/4 横手 裕 道教における死生観
- 11/11 阿部賢一 ヨーロッパ文学から見る死生観
- 11/25 増記隆介 仏教美術における死生観：11・12世紀を中心に
- 12/2 古荘真敬 近現代哲学における死と生
- 12/9 早川正祐 ケアの臨床死生学
- 12/16 鈴木晃仁 死と生と蠟模型
- 12/23 小松美彦 〈反延命〉主義の諸相
- 1/6 会田薫子 長寿時代の臨床死生学
- 1/19 堀江宗正 死の受容から生の受容へ

文学部04220061

教授 池澤 優ほか「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 ハイブリッド・法文二号館1番大教室

科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にし、膨大な情報をもたらし、寿命を延ばすに従い、これまでは考えられもしなかった様々な問題が生まれてきた。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか。いま現在生きている人間たちだけの経済や効率を技術的に優先させた合理性は、はたしてまだ存在しない次の世代に、理不尽な負担を押しつけることにならないのか。そうした哲学的・思想的であると同時に実践的・現実的な諸問題を根本から問い直すべく、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、さらには世代間倫理といった、いわゆる「応用倫理」といわれる新しい学問領域が、いま強く求められてきている。本講義は、その分野に関する俯瞰的な概説を行うものである。

応用倫理は、本来的に幅広い分野を包含し、多様な方法論を必要とする分野であるため、本年度はオムニバス形式で生命倫理、臨床倫理、環境倫理、現代倫理、世代間倫理などに関して順次講じていく予定である。

なお、本講義は「死生学概論」とならび、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

授業は対面を主とするハイブリッド形式で行う。授業計画は以下の通りである。

- 第1回 4月8日 ガイダンス (池澤)
- 第2回 4月15日 生命倫理1 (池澤)
- 第3回 4月22日 生命倫理2 (鈴木教授)
- 第4回 4月25日 生命倫理3 (鈴木教授)
- 第5回 5月6日 生命倫理4 (鈴木教授)
- 第6回 5月20日 現代倫理1—尊厳 (小島教授)
- 第7回 5月27日 臨床倫理 (会田特任教授)
- 第8回 6月3日 現代倫理2—戦争と戦死者の記憶 (西村准教授)
- 第9回 6月10日 現代倫理3—フロム (出口教授)
- 第10回 6月17日 環境倫理1 (福永准教授)
- 第11回 6月24日 環境倫理2 (福永准教授)
- 第12回 7月1日 世代間倫理 (堀江教授)
- 第13回 7月8日 まとめ (池澤)

□選択必修科目

文学部04220051

特任准教授 早川 正祐「死生学演習Ⅰ」(病いの語りをめぐる倫理) 2単位 S1+S2 水2 法文
一号館219教室

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』= Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics*を講読する(訳本でも可)ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ(vulnerability)・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りをはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会をはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部04220052

教授 池澤 優「死生学演習Ⅱ」(死生学基礎文献講読) 2単位 A1+A2 火3 法文一号館316教室

死生学の重要文献を日本語で講読する演習。講義形式と演習形式を併用する。

本演習は今まで、シリーズ『死生学』全5巻(2012年度)、アリエス『死を前にした人間』、ゴラー『死と悲しみの社会学』、キューブラー=ロス『死ぬ瞬間』、加藤周一ほか『日

本人の死生観』、エルツ「死の宗教社会学」（2013年度）、ニーメイアー『喪失と悲嘆の心理療法』、樽川典子『喪失と生存の社会学』、デーケン『新版 死とどう向き合うか』、シュナイドマン『シュナイドマンの自殺学』、新谷尚紀『お葬式』（2014年度）、清水哲郎『ケア従事者のための死生学』、平山正実『死生学とはなにか』、石丸昌彦『死生学入門』、岸本英夫『生と死』、竹内整一『花びらは散る 花は散らない』、島藺進『日本人の死生観を読む』、森岡正博『生者と死者をつなぐ』（2015年度）、ジャンケレビッチ『死』、フランクル『死と愛』、宇都宮輝夫『生と死を考える』、澤井敦・有松賢『死別の社会学』、高橋祥友『自殺予防』（2016年度）、ベッカー『死の拒絶』、門林道子『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』、山本俊一『死生学のすすめ』、高橋聡美『グリーンケア』（2017年度）、ボードリヤール『象徴交換と死』、リフトン『ヒロシマを生き抜く』、カステンバウム『死ぬ瞬間の心理』、メイヤロフ『ケアの本質』（2018年度）、ケーガン『「死」とは何か?』、岩崎大『死生学』、大林雅之『生命の問い』、高橋隆雄『生命・環境・ケア』、島藺進『ともに悲嘆を生きる—グリーンケアの歴史と文化』（2019年度）、ハンス・ヨーナス『生命の哲学—有機体と自由』、ドイツ連邦議会審議会『人間の尊厳と遺伝子情報—現代医療の法と倫理（上）』、『受精卵診断と生命政策の合意形成—現代医療の法と倫理（下）』、川島大輔・近藤恵編『はじめての死生心理学—現代社会において、死とともに生きる』、ロバート・リフトン『現代（いま）、死にふれて生きる—精神分析から自己形成パラダイムへ』（2020年度）を講読してきた。本年度は生命倫理分野を中心に以下の6冊を読んでいく。

レオン・カス編著、倉持武訳『治療を超えて—バイオテクノロジーと幸福の追求（大統領生命倫理評議会報告書）』、青木書店、2005。

ミヒヤエル・クヴァンテ『人間の尊厳と人格の自律—生命科学と民主主義的価値』、法政大学出版会、2015。

生命環境倫理ドイツ情報センター、松田順・小椋宗一郎訳『エンハンスメント—バイオテクノロジーによる人間改造と倫理』、知泉書館、2007。

小門穂『フランスの生命倫理法—生殖医療の用いられ方』、ナカニシヤ出版、2015。

香川知晶・小松美彦『生命倫理の源流—戦後日本社会とバイオエシックス』、岩波書店、2014。

安藤泰至『「いのちの思想」を掘り起こす—生命倫理の再生に向けて』、岩波書店、2011。

但し、講読する書は授業開始時までに変更することがあり得る。

文学部04220053

教授 鈴木 晃仁「死生学演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅰ） 2単位 S1+S2 火2 ハイブリッド・法文一号館115教室

2週のセミナーが1つのユニットである。第1週は過去の患者の歴史と倫理に関する研究論文を一つか二つ読み、第2週に、それと同じあるいは類する一次資料を読む。いずれも英語での発表とディスカッションである。このユニットが6回くらい行われる。

文学部04220081

特任教授 会田 薫子「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法入門） 2単位 S1+S2 火5 法文一号館315教室

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、保健・医療・福祉また社会学・心理学分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようにな

り、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部04220082

教授 池澤 優「応用倫理演習Ⅱ」（環境倫理文献講読） 2単位 S1+S2 火3 法文一号館316教室

いわゆる環境倫理と呼ばれる分野における文献を日本語で講読する演習。講義形式と演習形式を併用する。

本演習では今までJ. Miller, D. S. Yu, & P. van der Veer ed., *Religion and Ecological Sustainability in China*, M. Tucker & D. Williams ed., *Buddhism and Ecology: the Interconnection of Dharma and Deed* (2015年度)、リン・ホワイト『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』、ロデリック・ナッシュ『自然の権利』、アラン・ドレングソン、井上有一『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』、ピーター・シンガー『動物の解放』、J. E. ラブロック『地球生命圏—ガイアの科学』、トマス・ベリー『パクス・ガイアへの道—地球と人間の新たな物語』(2016年度)、ファン・ポッター『バイオエシックス—生存の科学』、アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』、岩崎茜『アルド・レオポルドの土地倫理—知的過程と感情的過程の融合としての自然保護思想』、石山徳子『米国先住民と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』、ジョン・パスモア『自然に対する人間の責任』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』(2017年度)、ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』、ベアード・キャリコット『地球の洞察—多文化時代の環境哲学』、ジェームス・スワン『自然のおしえ—自然の癒し—スピリチュアル・エコロジーの知恵』、桑子敏雄『生命と風景の哲学—「空間の履歴」から読み解く』(2018年度)、シュレーダー=フレチェット『環境の倫理』、R.D.ソレル『アッシジのフランチェスコと自然—自然環境に対する西洋キリスト教的態度の伝統と革新』、クレッカー&トゥヴォルシュカ『環境の倫理』、福永真弓『多声性の環境倫理—サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』(2019年度)、オット&ゴルケ『越境する環境倫理学—環境先進国ドイツの哲学的フロンティア』、フランク・ユケッター『ナチスと自然保護—景観美・アウトバーン・森林と狩猟』、尾崎和彦『ディープ・エコロジーの原郷—ノルウェーの環境思想』、石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動—ガンディー主義と〈つながりの政治〉』、真実一美『環境と開発—インド先住民、もう一つの選択肢を求めて』(2020年度)など、環境倫理に関する著名な著作を講読してきた。本年度も継続して以下の書を読むことを予定している。

吉永明弘・寺本剛『環境倫理学』、昭和堂、2020。

徳永哲也『ベーシック生命・環境倫理学—「生命圏の倫理学」序説』、世界思想社、2013。

徳永哲也『プラクティカル生命・環境倫理学—「生命圏の倫理学」の展開』、世界思想社、2015。

加藤則芳『森の聖者—自然保護の父 ジョン・ミューア』、山と溪谷社、2012。

アンドリュー・ライト、エリック・カツ、岡本裕一郎・田中朋宏訳『哲学は環境問題に使えるのか—環境プラグマティズムの挑戦』、慶応大学出版会、2019。

富田涼都『自然再生の環境倫理—復元から再生へ』、昭和堂、2014。

今までの講読で明らかになったのは、いわゆる応用倫理と呼ばれる分野の中には、意識的で

ある場合も無意識的な場合もあるにせよ、何らかの宗教的な感覚が入りこんでいるということであろう。現代社会における宗教は、既に宗教であることを標榜する団体によってのみ担われているのではない。本人が意識していない場合でも、宗教的な論理や感覚が非宗教的（世俗的）な領域に浸透しており、それが現代における宗教という景観の一面を構成しているのである。環境倫理の言説もその背景にある宗教や文化の感覚に多分に影響されているのであり、講読を通して、そのような現代的宗教性を明らかにしていきたいと考えている。

文学部04220083

教授 鈴木 晃仁「応用倫理演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅱ） 2単位 A1+A2 火2 ハイブリッド・法文一号館115教室

2週のセミナーが1つのユニットである。第1週は過去の患者の歴史と倫理に関する研究論文を一つか二つ読み、第2週に、それと同じあるいは類する一次資料を読む。いずれも英語での発表とディスカッションである。このユニットが6回くらい行われる。

□選択科目

文学部04220041

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅰ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅲ） 2単位 S1+S2 水6 ハイブリッド・法文一号館215教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実践家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

4月13日 オリエンテーション (Zoom)

4月20日 加藤実、日本医科大学医学部麻酔科、「集学的痛みセンターの誕生までの道のりとその意義(多職種集学)」(仮)

4月27日 前回のテーマに関するディスカッション (Zoom)

5月11日 阿部葉子、在宅ケアクリニック川岸町、医療ソーシャルワーカー、「在宅医療における意思決定支援— MSWの役割」(仮)

5月18日 前回のテーマに関するディスカッション

5月25日 田村未希、東大上野死生学・応用倫理講座、「ハイデガーの「死」の概念と他者理解の問題—ケアの現象学に向けて」

6月8日 前回のテーマに関するディスカッション

6月15日 小松康宏、群馬大学大学院医学系研究科、「共同意思決定(shared decision-making)」(仮)

6月22日 前回のテーマに関するディスカッション

6月29日 渡邊真紀、金沢大学附属病院看護部、「急性期総合病院で身体抑制しないケア」

7月 6日 前回のテーマに関するディスカッション

文学部04220042

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅱ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅳ） 2単位 A1+A2
水6 ハイブリッド・法文一号館215教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、本学内外の研究者の研究発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実践家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

10月 5日 オリエンテーション

10月12日 大北全俊(東北大学)、「COVID-19パンデミックと公衆衛生倫理」

10月26日 前回のテーマに関するディスカッション

11月 2日 高村一郎(高村クリニック 小樽)、「病診連携によるエンドオブライフ・ケア」

(仮)

11月 9日 前回のテーマに関するディスカッション

11月16日 岡田浩一(埼玉医科大学腎臓内科)、「保存的腎臓療法の必要性とその実践」(仮)

11月30日 前回のテーマに関するディスカッション

12月 7日 宮坂道夫(新潟大学)、「"弱さ"の倫理学」

12月14日 前回のテーマに関するディスカッション

12月21日 増井幸恵(東京都健康長寿医療センター研究所)、「" 老年的超越" の現在」(仮)

1月11日 前回のテーマに関するディスカッション

文学部04210043

特任教授 会田 薫子「死生学特殊講義Ⅲ」（臨床死生学特論） 2単位 A1+A2 火6 ハイブリッド・法文一号館215教室

臨床死生学と生命倫理・臨床倫理が交差する領域における諸課題の理解と思索をめざす。

予定トピック：臨床死生学の射程、生命倫理と医療倫理と臨床倫理の異同、医療とケアの多職種協働、意思決定支援、臨床死生学の諸課題をひとりひとりの患者の視点から臨床倫理的に検討（End-of-Life Care (EOLC) の諸問題、緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など）

文学部04220044

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義Ⅳ」（共感とケアの哲学） 2単位 S1+S2 木3 法文二号館2番大教室

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもか

かわらず、その内実は十分には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理（Ethics of Care）においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任（responsibility）・脆弱性（vulnerability）・依存性（dependency）・受容性（receptivity）といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学（もちろん一枚岩ではないが）に対して、どのような独自の貢献をしようのかを考察したい。

文学部04220045

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義V」（自律についての関係的なアプローチ：現代行為論・自由論の一展開） 2単位 S1+S2 木4 法文二号館2番大教室

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」（relational autonomy）について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセス（shared decision-making process）に相応しいものへと発展させる。

文学部04220046

特任准教授 早川 正祐「死生学特殊講義VI」（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開） 2単位 A1+A2 水2 法文一号館112教室

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」（epistemic injustice）の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」（epistemic responsibility）の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・性別・性的指向等による差別、またレイシズム等においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない（「証言をめぐる不正義」）。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない（「解釈をめぐる不正義」）。

本講義では、まず主にフェミニスト認識論（ないし社会的認識論）による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的

発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、.そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。そこでは同時に、潜在的偏見 (implicit bias) ・故意による無知 (willful ignorance) ・責められるべき無知 (culpable ignorance) に対して、私たちはどのような点で責任を負うのかも検討することになる。

文学部04220047

准教授 乗立 雄輝「死生学特殊講義Ⅶ」(死生をめぐる偶然と確率の問題) 2単位 A1+A2 水
4 法文一号館212教室

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのような関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然(性)にまつわる思考が深く関わっている。

また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまったり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

文学部04220048

非常勤講師 澤井 敦「死生学特殊講義Ⅷ」(死と不安の社会学) 2単位 A1+A2 木2 ハイブリッド・国際学術総合研究棟文学部3番大教室

普段あまり考えることはなくても、何かのきっかけから、自分はなぜ生きているのだろうと「生きる意味」を問う瞬間が誰の人生にもあるだろう。そうした問いについて考える時、「生」には「死」という終わりがあるという事実が否応なく私たちに迫ってくる。

とはいえこの死、とりわけ自分の死について、普段あまり考えることはないかもしれない。ただ、あまり考えることがなくても、死という終焉が必ず訪れるという事実は、漠然とした不安感となって、私たちの生をなかば無意識のうちに覆うものとなる。

哲学・心理学・精神医学などにおいて、以上のような事態はさまざまなかたちで考察されてきた。ただ、この授業でとりわけ焦点を当てたいのは、端的に言えば、死や不安の社会的様相である。

死という不可解かつ不可知の現象は社会的にどのように処理されてきたのか・いるのか、また死を基底とする不安感や社会や文化の変動に応じてどのような様相を呈することになるのか。このような問いについて社会理論の観点から考察することがこの授業の目的である。

文学部04220049

教授 古荘 真敬「死生学特殊講義Ⅸ」(死生をめぐる実存哲学の諸問題) 2単位 S1+S2 金5
法文一号館312教室

われわれが各自のかけがいのない「この身体」のもとに息づき、自身にとって一回的な生を他者たちと共に生き、年老いて、死んでいく、その多様な実存の様相と意味について、西洋哲学史上のさまざまなテキストを解釈しながら考えていく。扱われるテキストは、必ずしもいわゆ

る「実存哲学」に分類されるものとはかぎらないが、われわれの実存理解の精緻化をめざした解釈を試みていきたい。

文学部04220071

非常勤講師 轟 孝夫「応用倫理特殊講義Ⅰ」（技術時代の倫理—ハイデガー哲学の視点から） 2
単位 A1+A2 月4 法文一号館212教室

本講義では、「存在への問い」で知られるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの思索を手引きとして、現代技術の本質とはいかなるものなのか、またそうした技術によって規定された現代社会において可能な「倫理」とはどのようなものかについて考察する。

講義ではまず、ハイデガーの「存在への問い」の基本的内容を『存在と時間』から後期に至るまでの時代的展開に即して概観する。その際、彼の哲学的思索がもつ政治性にとくに注目したい。そのうえで講義ではさらに、彼の後期の思索における「技術への問い」を検討し、その倫理的・政治的含意を明らかにする。これらの議論を通して、講義では最終的に今日「応用倫理」と呼ばれている営み一般の問題点と限界を浮き彫りにしていきたい。

文学部04220072

非常勤講師 吉永 明弘「応用倫理特殊講義Ⅱ」（都市の環境倫理） 2単位 S1+S2 月5 法文一
号館112教室

環境倫理学の基本的な枠組みを知るとともに、「都市の環境倫理」の内容を理解することによって、環境問題と都市問題について倫理学の視点から考えることができるようになる。

- (1) 倫理学からの環境問題へのアプローチについて
- (2) アメリカの環境倫理学：土地倫理、自然の権利、環境プラグマティズム、環境正義
- (3) 日本の環境倫理学：世代間倫理、地球全体主義、ローカルな環境倫理
- (4) アメニティという視点
- (5) 哲学的空間論、人間主義地理学、風土論
- (6) 都市の環境倫理：持続可能性、都市における自然、アメニティ
- (7) 事例研究：清溪川復元、美の条例

文学部04220073

准教授（新領域） 福永 真弓「応用倫理特殊講義Ⅲ」（食と場所の環境倫理） 2単位 A1+A2
火4 法文一号館215教室

食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自

然らしき、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

文学部04220074

非常勤講師 村上 靖彦「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究の方法—ヤングケアラーへのインタビュー調査などをもとに） 2単位 S2 集中 ハイブリッド・教室未定

現象学的な質的研究入門

現象学的な質的研究は、個別事象の運動を内側から分析するのに適した方法論である。その方法論の概要と実例を示して習熟することを目的とする。

方法論の説明を行った後、ナラティブメディスンの方法についても説明する。そのあとインタビューの事例分析を行っていく。参加者からの希望があれば、発表もおりこむ。事例は、子育て支援の対人援助職、精神科病院に入院する当事者、子育て支援を受ける当事者、ろうの発達支援のグループなど。

文学部04220075

非常勤講師 北條 勝貴「応用倫理特殊講義Ⅴ」（マイノリティーの環境史／倫理学） 2単位 S1+S2 月5 法文一号館212教室

現在歴史学界においては、パブリック・ヒストリーという領域＝運動が盛んになりつつある。これは、歴史実践を職業歴史家の独占から解放し、一般社会との交渉において、より公正かつ公共的な歴史のあり方を目指してゆく試みである。その範疇は、学校教育から博物館展示、歴史を題材としたアニメーションやゲームまで多岐にわたるが、現在支配的な位置を占める歴史言説に対し、異議申し立てを続けてゆくことにも大きな意味がある。それは、現行の歴史言説が、必ず何かを隠蔽、抑圧することによって、何かの忘却や不在によって、自己実現を図っているためである。

例えば、現在支配的な歴史叙述のあり方は、男性選好の強い社会状況と相互構築の関係にあり、かかる現状に適応できない男性や女性、そして性的マイノリティーの人びとを強く抑圧している。家父長制やルッキズムと密接に結びついた〈男らしさ〉〈女らしさ〉は、前近代の歴史事象の恣意的な運用によって正当化されている。さらに、アンソロポセンの観点からすれば、ヒト至上主義の歴史叙述は、他の動植物、人間以外のアクターを抑圧することによって成立しているといえよう。中高までの教科書を典型とする一般的な歴史の語り方においては、動物や植物はヒトの文明の〈素材〉でしかなく、それぞれが歴史の主体として描かれることはない。多くの人びとは、そうした歪んだ歴史語りを〈事実〉として記憶させられ、現行社会の絶えざる再生産に参加させられているのである。

本講義は、これら歴史的に隠されているモノ・コトのうち、ジェンダー、および動物に光を当てる。そして、個々の事例の分析を通じ、歴史／環境／倫理にわたる問題系を明らかにすることで、パブリック・ヒストリーの実現に資することとしたい。

文学部04220076

教授 鈴木 晃仁「応用倫理特殊講義Ⅵ」（医療者の歴史と倫理） 2単位 A1+A2 金4 ハイブリッド・法文一号館212教室

古代・中世から現在までの疾病の歴史と倫理を講義する。疾病が医学だけでなく、政治、経済、社会、文化、環境などのさまざまな要因で成立することを、具体的な事例に沿って解説する。

文学部04220077

非常勤講師 福嶋 揚「応用倫理特殊講義Ⅶ」（気候崩壊の時代を生き延びる～人新世の倫理・経済・宗教） 2単位 A1+A2 金2 法文一号館314教室

気候変動は、現代世界の危機を象徴し代表する危機と言ってよい。しかもこの危機は単なる環境問題の枠におさまらない。今日のグローバル化した世界においては、地球生態系の崩壊に加えて、貧困の拡大（貧富差の極大化）、さらには世界戦争という三つの危機が、混然一体となって進行している。

この複合的な危機の原因を探っていけば、国民国家と資本主義経済という、二重の権力が肥大することによって引き起こされる危機であることが見えてくる。これを軍事力と経済力の複合体と言いかえてもよい。

この複合体の起源は、遠く古代世界に現われた諸帝国にまでさかのぼる。古代帝国の軍事的・経済的な支配に対する一種の対抗運動として世界各地に現われたのが、今日にまで続く伝統的な宗教思想だった。哲学者ヤスパースはそれを「枢軸時代」と名づけた。

もっともキリスト教は国教化して帝国宗教となって以来、そのような原点からしだいに離れていった。とりわけ近代以降、北大西洋地域のキリスト教諸国家は、果てしない経済成長と覇権争いによって、生態系破壊に象徴される地球規模の危機の原因となった。西欧キリスト教文明は、今まさにそのようなグローバルサウスからの告発に直面している。

経済、宗教、道徳がからまりあった危機に直面する現代において、それらの垣根を超えるような視点が必要となる。とりわけ軍事力とも金（マネー）の力とも異なった理念と実践こそが必要不可欠となる。そればかりか、既存の社会システムの崩壊を予期しつつ、その先に地球生態系が共に生き延びる希望を描くという、きわめて困難な課題が待ち受けている。

この講義では、倫理学とキリスト教の研究者の視点から、以上のような複合的で越境的な問題にとりくむことにしたい。

教育学部09221402

大塚 類「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ） 2単位 S1+S2 木5 オンライン

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みる。事例に基づく質的研究の一種だと言える。本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げる。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定である。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉がある。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋がられるであろう。受講者が、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、受講者の物事を見る観点や、自己／他者理解が深まることを目指す。

医学部02218

教授・准教授・助教 赤林 朗、瀧本 禎之、中澤 栄輔、宇田川誠「生命・医療倫理Ⅰ」 2単位 A2 金1/2 医学部三号館S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的

側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

医学部02246

教授・助教 池田真理、キタ幸子、森崎真由美「家族と健康」 2単位 A1 月1/2 医学部三号館1F N101講義室

時代の変化とともに家族形態は変化し、さまざまな状況・諸問題に応じた援助が家族に必要となっている。さまざまな健康レベルの家族のヘルスニーズや、家族の健康問題によって発生する家族問題を理解し、本来の家族機能を高め、意思を尊重し、健康増進に向かうよう、家族看護の展開を理解することを目指す。具体的な目標としては、

- 1.さまざまな家族の健康問題によって発生する家族の課題と家族看護の必要性、意義について理解する。
- 2.家族看護の基盤となる家族を捉える諸理論（家族発達理論・家族システム理論・家族ストレス対処理論ほか）と、その実践への活用方法を理解する。
- 3.家族看護の諸理論を説明できる。家族を単位としたアセスメントの方法を理解する。
- 4.家族看護の展開方法としての家族看護過程を理解する。
- 5.家族の発達段階に応じた健康問題と、家族に対する援助の方向性を理解する。

農学部060500021

教授 芳賀 猛「生命倫理」 1単位 S1 月5

我々は皆、他の「命」をいただいて、生かされている存在である。人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由で、ヒトや動物の命の扱い方が異なっている。本講義では、人の生命や死に関わる倫理上の問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな「生命」との関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として、多層な生命をどう秩序立てて理解し、人類の福祉を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

農学部060500031

教授 根本 圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5 農学部一号館第8講義室

食と生活を中心に現代の科学技術と社会との接点において、価値観を伴って判断を下さなければならない、ときに相矛盾するさまざまな相互作用を多方面から学ぶ。食の安全をめぐるリスク科学の基礎、生産者・流通関係者・消費者・行政の立場からのリスク評価/リスク管理/リスクコミュニケーション、具体的な安全性評価と技術管理、コミュニケーションのあり方を考える。

教養学部08F1303 総合文化研究科31M300-0101S

客員教授 小松 美彦「科学技術リテラシー論Ⅰ」（「〈反延命〉主義」の歴史的現在—「医」の倫理とリスクコミュニケーション） 2単位 S1+S2 金4 駒場一号館122教室

西洋近代において、傷病者を救命し延命することは医の大原則であった。しかし、過去半世

紀、その大原則に異を唱える潮流が現れ、国内外を問わずしだいに勢いを増してきた。かくて、今日の日本では、人工呼吸器・人工透析・胃瘻などの「命綱」にマイナスイメージが付与され、また、そもそも「延命」という言葉自体が否定的な意味で使われることが多くなった。しかも、「〈反延命〉主義」と総称しうるこうした思想は、相模原障害者殺傷事件（2016年）の犯人の殺害論理とも重なっており、現在のコロナ禍にあっては、高齢者のトリアージの議論にも繋がっている。本授業では、こうした「〈反延命〉主義」について多面的に考察する。それは、換言するなら、生老病死をめぐる「医」の倫理とリスクコミュニケーションを根底的に検討することでもある。

教養学部08D1002

准教授 鈴木 貴之「応用倫理学概論」（功利主義と応用倫理学） 2単位 A1+A2 水5 教室未定

功利主義の観点から生命倫理学を中心とした応用倫理学の諸問題を論じたテキストの講読と議論を通じて、応用倫理学の主要問題を学ぶ。具体的には、以下のトピックを扱う。1. 功利主義の基本的な考え方と問題点、2. 動物の道徳的地位、3. 人工妊娠中絶、4. 安楽死、5. 貧困、6. 環境の道徳的地位、7. 功利主義の可能性と限界。演習形式を用い、各回の担当者がテキストの内容を報告し、それについて全員で議論する。授業初回から文献の講読を始める予定なので、受講希望者は初回授業までにICT-LMSに仮登録をするか、メールアドレスに連絡していただきたい。